

公議所日記誌

從第
至拾
武

特別
イ4
696
83



696
83

公議近日誌第八上



小寺啓
玉口所文店

四月十二日會議之例刻當分議長同様心得森金之趣
 議事取調掛議員百三十三人外之水野村俊年并諸藩
 參聽人例席へ出仕例あり議員漢土及茅法ヲ參用
 議案ヲ議取茅四字半一同退散也
 漢土及茅法御參用可然又建白
 謹案古今萬國士ヲ取ルノ法品々有之趣ハ候得共最公正
 ナルハ漢土ヲ第一致シ候趣 西洋人々常ニ稱揚仕候所
 有又候我邦從來王ヲ取ルノ法ニ倣ハセラレ進士及茅ノ
 法ヲ御用ニ相成候ハ又會議ノ法下並行ハレテ東西ノ
 両美ヲ御合作ノ形ト相成可申候
 但シ又會議ノ趣意ハ人心一和ヲ致スニ在リ及茅ノ趣
 意ハ人材ヲ興テ少ルニ在リ並行ハレテ相成ラズ此意
 御人會被成下度奉願候

尤漢土及芽ノ法ニ頗ル流弊モ有之由右ハ全ク科目ノ互
方不得算耳試官ノ公正ナラザルトニ由ル事ト相見候ヘ今略
改正ヲ以テ試ニ其有増テ奉申上候

毎年一度ノ時日ヲ定メ海内ノ有志ノ士ヲ募リ其才學ヲ試優
等ニ定ル者ヲ舉ケ四等以下ノ官ニ任シ之ヲ賈際ニ試ム
科目ハ實地適用ヲ主トシ和學漢學算學經濟文章天文地理
兵學律學醫學博物學ノ類タルベシ

但シ詳ナル事ハ會議ニテ取極一可然リ
試官ハ議事所ヲ臨時ニ之ヲ撰舉スルベシ
試業ノ法ハ當リ試官ヨリ策問ヲ發シ其場限ニ對策ヲ作
セ右ノ隱置試官各甲乙ヲ記シ甲字最多年者ト上等トスベシ
右ノ通三回ノ試業ヲ為シ三回共ニ上等ニ答ル者ヲ甲字
トスベシ

試業ノ後對策ニ試官ノ甲乙ヲ記シタル儘作者ノ姓名國所
ヲ記シ登第落第等并ニ其任セラシメ官階ヲ録シ合シテ一卷下
ナリ上稱シテ天下ニ公示スルベシ
以上試業法ノ大略ニ御座候猶詳ナルハ時ニ臨テ酌定

可仕様ニ奉存候

右ノ如ク御法相ニ候得ハ大抵流弊ノ生ズベキ御懸念有之則
敷若シ然レハ右ノ如ク萬國ニ御越越被遊候御良法可有之ト
思考ノ儘不備在テ奉申上候
右評論鈔出 前又議業同意ノ者ハ載收セズ

對策ノ上等ナル者ヲ議業ニシテ衆議ニ掛ケ對策者自ラ讀
上ルハ質問討論ニテ之ヲ察シ然レ後ニ可否ノ入札ニテ可
序多キ者ヲ舉ゲルベシ

至當ノ論ナリ然レハ我國漢土ト自ラ風習ヲ異ニス限ニ施行ス
可ラズ本文參用ノ字ヲ熟考スベシ

西京大學校及ビ丹波縣ニ舉司ヲ置キ生徒郷貢ノ行次學
藝ヲ廢ミ舉狀ヲ添ヘテ差出サシムル事
科員中ノ和學漢學ヲ除キ歴史軍學武藝等ヲ加フル事
郷貢ニ旅費ヲ給セラレノ事

奥村權三刑
福井謙藏

初落第ノ者其材質ヲ擗ヒ造士トシ明年再試第ニ及カ
將放還ノ事

講武ノ科ヲ本文科目中ニ列シテ文弱ノ弊ヲ防グベシ
二木總殿助
青山七郎左衛門

大略同論

本文試案ノ法ヲ作文ニ長タル者ノ優等ニ登ルベシ其徳中
ニ至ラズタル士ヲ優等ニテ擧グルベシ
志賀律三郎

大略同論

塚本九一郎

科目ノ内ニ德行ノ目并ニ武舉ノ科ヲ加フベシ
戸田保

大略同論

磯部寛五郎

有志ノ士ニ不限ル人ニ至ル迄德行ノ本トシ學者者ヲ募ル試ムベシ
佐藤榮

至學ヲ然レモ慎ミ重御施行漢土浮華ノ弊ヲ踏ムカラズ
宇田節之助

大略同論ノ者ニテ

成田作左衛門 松崎元右衛門 加藤右衛門

府藩縣ニ及ヒテ廣ク學校ヲ興ス人材教育ノ道ヲ興スベシ且
本文科目中ニ孝弟德行等ノ科ヲ加フベシ
雨森謙三郎

大略同論ノ者七人

高岡橋和孝留 中里行藏 小泉兵部
植口十郎左衛門 小林儀左衛門 園田勘右衛門
山崎新五郎

右竹備門

尤妙ナリ宜シク郡縣ノ議ヲ決シテ後此法ヲ立ツベシ也試法ハ
序ニ序ヨリスベシ

鎌田年十郎

府藩縣ニ及ヒテ學校或ハ官舎ニテ鄉試ノ例ヲ用ヒ其選ニ中ル
者ヲ郡下ニ解送シテ試ムベシ尤武官ノ者モ試用ヲツラ

文弱ノ弊ヲ矯ムベシ

同論

恒園完治

毎年四月ヲ以テ試ムヘシ實際ニ試ムハ半歲ニ限ルベシ且科目
云々ハ和漢混淆天邪而教漫入易キノ憂アリ和文ニ學ハ固
ヨリ我ガ學子ノ所ナラズ科目ニ加テ可ク科目ヲ四縮ニ分ツ
左ノ如シ

中澤見作

- 經世學
- 會計學 典禮學 法律學 管繕學 民政學
- 商業學 礦山學 輿地學
- 海陸兵學 造艦學 砲術學 操練學 航海學
- 築城學 器械學 兵術學
- 天文学 地理學 數學 博物學
- 醫學

内科学 外科学 本草学 解体学

沈理學醫學の會談所ヲ稍遠キ者故々所學ヲ於テ試ム
ベシ且試業對策ハ和文ニスベシ

杉浦兵庫

唯法律ノミヲ以テ撰ムハ未タ全キヲ得難シ即今更ニ藩
主ニ令シテ士ヲ舉ガシメ之府縣ニ監察使ヲ置テ人撰此及
第ノ撰ヲ得タル者ト併セテ官ニ任セハ取士ノ法備ルト云

山崎傳

實才實學ヲ洞察スルハ試官ノ任ナレハ試官ヲ撰スルハ
肝要ナリ

永野春樹

經濟ノ才ヲ抱テ策文等ヲ能クセザル者ハ之ヲ熟察シ
策文ニ抱テ之ヲ採用アリクニ且試業ノ法モ都説ヲ陳ス
甲科 試業三回共ニ上等ニ登ル者四等官以下ノ官ニ任テ
實際ニ試ムベシ

乙科 二回上等ニ登ル者五等官以下ノ官ニ任テ

丙科

實際ニ試ムベシ
一回上等ニ登ル者姓名ヲ簿ニ記シテキ明年ニ試業
ヲ待其時復一回上等ニ登レバ乙科在ニテ官
以下ノ官ニ任ジ實際ニ試ムベシ

船津 齊

良法ナリ然レモ試官ノ新達ノ待詔局ニテ撰テ試官ニスベシ
且文章實行兩美ヲ兼ル者寡シ故ニ三試ニテ中以上ニ
登ル者ハ對策ノ外ヲ精細ニ質問シ其辨論ヲ試ミ對策辨
論共ニ上等ノ者ヲ甲第トシメ對策ニ試官ノ甲乙ヲ記スル
儘議事所ヲ可存得失及ヒ其官ニ任スベキ等ヲ公議スベシ

中野 齊

良法ナリ然レモ履等ノ外猶次等ノ者モ兼テ簿籍ニ記シ置キ
缺官アルノ日順テ席ヲ以テ舉ルモ可ナリ又缺官アルニ當テ臨時
ニ缺官ヲ行フモ可ナリ且朝一前後朝官ニ任ヤラシメ者若
其出留ヲ得ガレシノ設アラバ此試法ヲ踐ミシムベシ議其ヨリ
登庸ノ者ハ尤精選スベシ

生田 羊格

文章實行兩美ヲ兼ル者寡シ故ニ文章技藝ノヲ取ヘラ
ル且文章ハ假若字ヲ文ハ記ムベシ

北村 經藏

大略回論

中川 潜叟

登第落第上梓シテ公示ス云々ハ進取ノ弊ヲ生ルノ本
ナリ登第ヲ示スハ猶可ナリ落第ハ断然示スベカラザ
ルナリ

服部 清三郎

良法ナリ但シ四等以下ノ官ヲ授ルハ過當ナリ六等以下
ノ官ヲ授クベシ

依田 新三郎

- 一 及第法ヲ立シトナラハマツ天下ニ學校ヲ設クベシ
- 一 大學校ニ試ムヘキ者ハマツ諸州學校ニテ試ミ然レ
後ニ大進子ニテ員スベシ
- 一 試官ハ其人ヲ得ガレハ試ムルモ益ナシ
- 一 進士等已ガ科目ノ外ニ時務集ヲ試ムベシ

一 奇材異能ノ士ハ別ニ保舉法ヲ立ベシ
府見達左門
同論

科目中ハ武術ノ科モ設クベシ且學者從元ニ博識ヲ務メ
實用ヲ務メカレ可ラズ

此法行ハ無恥濫進ノ弊ヲ生ゼシ非常ノ士ヲ聘スル設ク
アリ然レテ舉爾行知トノ古訓ニ從フベシ
因本治兵衛
岩田瀨左門

大略同論

充當ナリ漢土郷貢ノ姿ニ倣ヒ府藩縣ニ令ニ撰舉イカ
武テ可ナリ
武田年之助
松野彦彦

大略同論

蜂屋新
松野彦彦

試官ハ行政官ヨリ御撰任相成リ議事前ニハ心付候
人物者之節申上候事ニ仕度候
那須金右衛門

直ク是又ノ後ニシテ實理ヲ先ニシ時務經濟等ノ科ヲ設ク
ヘシ且試官其人ヲ得ルルハ肝要ナリ
日置熊次郎

考校功過課試才藝ノ二者今日ノ急務ナリ
法備ル
坂田 芳

本朝考課法は載セラレ令中ニテリ其節ニテハ良法ナラズ
對策ノミニテハ虚文ニ流ル試藝ノ法並行フベシ
森安七右衛門

一 試官ハ明識公正ヲ務メ進舉ノ人ハ賦畀漁鹽ノ中ト
雖モ乏ク舉ルベシ

一 若シ其人窮乏ナレハ其官廳ニテ其實用ヲ助ケ進
舉スベシ

一 若シ小過アリトモ改之ニ於テハ進舉ニ等シ

一漢土孝廉或ハ賢良茂才等ノ科アリ是等ノ意ヲ本
トシテ選舉スルベシ

美事ナリ但シ及第ノ法舉リ候得ハ人材ヲ養フノ費用
ハ府藩縣ニ募ルベシ

美事ト云ベシ先ツ郡校ヲ建有志ノ者ヲ學ニ入シ才德
成テ王都ニ貢スルベシ又有志ノ上ニ言スル者等ハ公議所
ニテ議所ニテ議員ト討論ナサシメテ行一ナラハ登
庸スルベシ

此外猶詳論アリ下卷ニ出ス

公議所日記八下

第五号議案撮畧

漢土及第法御参用可然之事

佐藤八右衛門

漢土及第ノ法ニ依テ美事ト云ベシ然レドモ一ツ府藩縣
ニ學校ヲ建後ニ武舉ノ法ニ及ベシカレバ利禄ヲ争ニスルノ
弊アリ教員者ト試官ト其人ヲ得ザバ行ハ難シ

極テ妙ナリ試法其他ノ機ニ依テ換クベシ
村田忠之丞

大小ノ學校ニテ教授方ナク者生徒ノ所長ヲ察シテ
朝ニツケ時日ヲ定メテ各課各局ニ試シ若實相通セシ
上ニ選舉スルベシ

良法ナリ然レトモ科考ハ空文無益ニ成行モノ故試官
近藤百助

ヨリ其人ノ正邪ト實行トニ注ニ名スベシ

文學經濟兩ヲ兼ルヲ得難シ學力ノミヲ以テ士ヲ取ラバ
恐ラクハ任用適宜ヲ失セシ

久松修理

至要ノ候普ク府藩縣ニ令テ公撰ノ法ヲ設テ學科ヲ
以テ人ヲ撰ニ之ヲ
朝廷ニ達シ然ル上試業ノ法ヲ以テ實際ニ試ベシ且試官ハ
豫メ御精選有之度候

小関與右衛門

極テ是ナリマツ藩ニテ選舉ノ法ヲ設サセテ以テ首セシメ
且虚飾僥倖ヲ防グノ術アリトシ

澤邊以三郎

本文募士ノ説然多紛ニ別ニ好指置アル心ニ然レドモ
御國体確ニシテ後議ニテ可ナリ

笠岡英之進
科目ヲ添テ篤行ノ
御採用ノ上漢代ノ例後賢良方正等ノ科目ヲ添テ篤行ノ

十七御登庸アラセラル可然候

増田貞

先郷試ノ法ヲ府藩縣ニ下シ舉人ヲ定メテ輩下ニ具シ
場屋ノ會試ニ登第シテ後官職ヲ授クベシ科目ハ文武ニ科テ
建其術ニ精キ者ヲ試官トスベシ試官ハ臨時ニ選バ輕易ニ
屬セシ公卿諸侯中ニ試長ヲ選ビ又宿儒ヲ選テ主考官
ニ比スベシ且落第ヲ天下ニ公セバ生徒落第ノ辱ヲ恐レテ舉
業ヲ廢セシ

清水源次郎

異存無之候但科目ノ中農學ノ課目ヲ御如ク有テ可然候

關小四郎

府縣ニ學校ヲ建テ士ヲ貢セシムベシ且進士ノ登第落第ヲ以テ
府縣知事ノ教長ヲ定メシ

鈴木才藏

人ヲ取ルニ實地ヲ用ルノ肝要ナレバ試官亦意ヲ用之ベシ

田邊 確

異論ナレバ科目試官兼問等心ヲ用ユベシ

四王天兵亮
國人尊奉スル所ノ者ハ假令博識ナラザルモ必ク用之ベシ科目ニ
拘ル可ラズ

京僧彦助
試業ノ法三回ヲ限ラズ數度其賢才ヲ試ミ又其行ヲ熟察セバ
遺憾ナシ

福井大助
異論ナシ志有志ノ士ヲ募ルル規則宜ク工夫アルベシ

戸塚左近将河
公平ト存候只願クハ別ニ條ヲ掲ケ實際的當務クハベカラサル
ノ法ヲ改メ更ニ一層ノ確定ヲ加ヘハ詮棟ノ遺漏ヲカラシ

安柳安右衛門

同論

堀和錦藏
良法ナリ然レモ三面ニ及ハル見識アル者ハ煩キ事又ハ文章
巧ニシテ行思キ者アリ此サバハル心カラス且廉潔ノ者ヲ拔擢スル
一堅ホ要ナリ

羽室雷助
且ク府藩縣ニ命シ賢良方正等ノ士ヲ選擇セシメ之ヲ實
際ニ試ミ之御登之庸アリ度候

岡田保
試官人ヲ得ルル所要ナリ且試業ハ春秋ニ定ムベシ

善吉司

此法速ニ現職ノ者ニ試ミ不學無術ニテ僥倖ナルモノ退テ
後真ノ賢才始テ出ベシ

岡田又右衛門

及第法ハ官ヲ府藩縣ハ學校ヲ設ケ順序ヲ以テ
朝官ニ拔擢スルニ在リ試業ノ弊ヲ除キ實際ノ法ヲ設クベシ

本林 僧

大略同論

杉森六郎兵衛

ハツ一年行ヒテ追テ永創ト定ム諸大小藩ノ定自多クテ
藩王ニ命シ人オテ選出セシムニ在リ奔競射利ノ徒安進ヲ得セ
シメズ且試官得人ノ所要ナリ

務ヲ府藩縣ニ命ジテ人物ヲ選舉セシメ其上ニテ對策及
第ノ法ヲ行フベシ

園田 孝
小林 則右衛門

對策ニ漢文ヲ用ヒタシテ實地適用ヲ心付ケ可申候又幕
士ノ法ハ府縣學校尙取テ相成才能アル者ヲ試テ後出サシム
ベシ又甲乙ノ二科ヲ多テ甲科ハ議案ノ如クシテ科ハ試案三
回ノ内ニ回上等ニ登ルモノヲ乙科トシ甲乙二科ニ入ル者ヲ登第ト
シテテ實際ニ試ルベシ簡要ト存候

帆足 龍吉

科擧ノ法郡縣ニ行フベシ封建ニ行ヒ難カラシ諸侯ノ臣素
ヨリ世祿ノ舊アリ又相應ノ委任アリ假令濟世ノ才ヲ抱シ
トモ其國ヲ離レ朝榮ヲ求ムルニ望ミアルモノ亦望ミアルモノ
落第面目ヲ失フヲ恐レシ故ニ幕ニ應スル者落魄書生
式ハ農商賈ノ人ニ過ギズ天下ノ士ヲ網羅スト云カケル
大畧同命

毛 受將監

盛ニ學校ヲ開キ才徳ノ士ヲ撰擧スベシ

赤岸 五藏

官ニ任スルハ筆趾筋操ヲ第一ニ撰ルベシ又試官各甲乙ニ定メ
登第セシメ之後子其任ニ堪ル者ニ任セラルル時ハ初メ甲乙ヲ定メ
試官モ連坐ノ漸處置スルベシ

熊谷 貞藏

毎半一度有志ノ士ヲ募ル集此文中ニ加入スレアルハ何如ノト存候
有志ノ士ヲ募ルハ定數アリテ可ナリ

水野 立三郎
平井 東馬

其性曾尤者モヨリ事ヲ成シ敏ルモ事ニ堪ヘザル者ハ必學上ノ
對策ヲ以テ其人ヲ取捨シ難シ試官注意スルベシ

平山 志右衛門

文才優劣ニシテ入才登庸ノ法立サセ度奉存候

富松 何右衛門

博シ德行ヲ識アリテ時務ニ適用ノ士ヲ撰ルベシ試官ハ重任アリ在

河 口 中 之 丞

廷賢明久親ヲ試ラシムルモ元當ナリ併此法郡縣中ニ在テハ入才
好テ出ベシ封建中ニ出ルル難カルベシ宜ク其領主事力モテ入
才ヲ出スル法ヲ立ベシ

議長ヨリ公議人ニ達書

公議新法則案改正并例ノ好ク入札ヲ以テ立者ノ文撰可致事

當公内第千字新十一字公議相始ノ條事

第千字御用金ヲ可廢議初決可否決定ノ前法則備ハラズ見込違

有之者本且札法ヲ以テ再決議ニ及ビ修處

可トスル者若干人

否トスル者若干人

御用金廢止ノ可トスル者若干人

御用金廢止ノ不可トスル者若干人

無定見一人

是ニ因テ可トスル者若干人

第二條御用金可廢ノ議御務用相或可然旨衆議一定

天裁候書奉伺

仕候ニ付奉伺

天裁候若シ漸改正ノ廢有之修前分論御務用ノ有無共

御用示ノ上御施行有之廢候也

議長

猶以御用示ノ前議案二枚ノ内一枚御務用ノ有無共御

檢印ノ御改札有之廢候也

別百

御用金ヲ廢之國債法御設ノ條決議相成候亦以未不得

已ノ費用有之第國債法ヲ以御借リ入ル相成且御一新

以未今日ニ至ル迄農高等ハ御申付相成候御用金ニ即

今之ヲ國債下致其者共申之決并國債法割合利息

御務ニ相成候條仕候ニ奉存候

議長

本日箱評ヲ檢閱ス

公議所日記第九
外國官問題十七條

一 開鎖論云今議者、説其多、或曰、夷狄、禽獸、近、
ベカラス、或曰、我邦、富強、未、
短、補、然、後、
ニ、
ノ、
ヲ、
ヲ、
ヲ、

一 縦各之ヲ鎖スニ至ラハ漸然之ヲ稀讓シテ可ナルヘキヤ將々或ハ
在任ノ外國人氏ヲ斬殺シテ可ナレハキヤ彼等ノ抗ルルノ節之ト
對應スルノ道果シテ如何
茅三

一 若シ彼軍兵ヲ以テ來リ攻ルノ節我ニ對應スル兵備ナクハ
我國人

一 皇室下共三例レテ止ムヘキカ當然ナルヤ如何

一 若シ彼下戰事スルノ期ニ至リ漸然兵力ヲ以テ彼下奪リヘカニナルヲ
論シ異議ヲ起ス者否ハ如何シテ之ヲ説得ルヘキヤ如何
茅五

一 若シ鎖港ト一決シ且ニ戰闘ヲ興スノ節我堂ニ
王字ヲ何レノ國ニ寄贈シ奉リ何ノ兵力ヲ以テ之ヲ保護シ奉ル
ヘキヤ其目的ノ實備果シテ如何
茅六

一 今日我國ニテ多クニ無罪ノ外國人ヲ斬殺、或ハ無金銀流布
或ハ莫大ノ金銀ヲ借用シ、年月ヲ経ルニ後、
重ナリテ各國申シ合セ兵ヲ動シ攻有ニ迫リ、其曲事ヲ
詰問シ或ハ金港地ヲ奪領シ或ハ通商ノ形ヲ押ヘ或ハ諸島ヲ
掠ルルノ節如何シテ之ヲ防禦スルヘキヤ將々何ノ策ヲ
以テ之ヲ壓制スルヘキヤ如何
茅七

一 即今ノ形勢ヲ以テ見ル將々開港ヲ好む者ハ西洋ノ道ヲ

至張之鎖港ヲ欲スル者ハ和漢ヲ至張ト若シ之ヲ一ニ歸セシ
メトセハ將ク何レノ道ヲ以テ嚴然確定決斷スルヘキヤ
如何

一 我神道ヲ以テ日本全列ノ入民ヲ教導スルノ法現在實地
上ニ施スル道果如何

一 若シ之ヲ一歸スル時ハ前道ノ議イッソカク今テハ時勢ニ適當
スルヤ其利害得失果ニテ如何

一 我邦各國ト條約セシハ入民貿易カスルニ在リ今ヤ數年以前ヨリ
各國ヨリ競ツテ海陸軍兵隊ヲ我

朝ニ居住セシメタリ且ノ入民ヲ保護シ若シ異變アル時ハ力ニ
及ナク出之各處ヲ討テ之ヲ併合英國ノ兵隊大凡三千人
佛之ニ次ク米其他ハ海軍ノミナリ我
神州ニテ古昔未タ外海ヲ受ク其輕侮ヲ招ク今ヨリ甚ニキ
ハナシ之ヲ清淨スルノ法現在實地ニ施スル道如何

第十一

一 按ルルニ石ノ兵隊ヲ移往セシムル事萬國ノ公法ニ依リ將ハ
自己ノ屬國ト存シテ外兵隊ヲ備ヘテ交際スルヲ斷又數年

以前ヨリ外國商民ヲ殺害セシメテ數千人ニ及クテ以テ彼ノ
政府ニ於テモ一在殺害ニ違フ毎ニ兵員ヲ增加シ終ニ今日ノ

盛ニナルニ至レルナリ此殺害ノ所業遂ニ增長スル時ハ彼等
亦從ツテ兵員ヲ増シテ守備益々堅固ナリ之ヲ制止スルノ
道果ニテ如何

一 若シ年々月々進ヒ外國人ヲ殺害スルハ彼ノ兵員遂ニ増加シ
終ニ各港ニ充滿スル時ハ我

神州ノ活は存スルヨリ甚キハナシ前今ト雖モ既ニ全軍ヲ
我邦運來ノ政教ヲ以テ勸令外國ニ對シテ右ノ諸件ヲ一洗

改新スルノ道現在實地ニ施スル策果ニテ如何

一 外國人退之兵員ヲ居住セシムルハ我政府内外人民ヲ保護スル

然ハザルヲ察其生殺與奪ノ權政府ニ歸着スルニテハ兵隊ヲ未
國ニ歸送スルニテカキテ陳言ス夫レ生殺與奪ノ權政府ニ
在リ内外人民ヲ保護シ以テ信義ヲ實クニ在リ今ヤ外國ヨリ
我國内ノ可否ヲ別ルニ至ル此汚辱ヲ洗淨スルノ實計
果シテ如何

第十四

一 舊幕ノ時生殺與奪ノ權下民ハ幸ニ其故ニ政權在リ一新ト
至レリ今ヤ其覆轍ヲ踏ムノ憂ヲ防擧スルノ道如何

第十五

一 各國公使ノ在リ通行ノ節我ニ守警言ノ兵備ナリニテ彼兵隊
前後ニ權ニ横行スルノ前如何ニテ之ヲ差留ヘキ身將父
之ヲ禁セストモ可ナルハキヤ如何

第十六

一 府藩縣ノ士直兵隊等道路通行ノ節外國人ト行逢
亂暴ニ及フヲ將ニ當リ如何ニテ之ヲ制スルヤ將政府
威權ヲ以テ之ヲ制スルノ力アルヤト即今各國人ヨリ傳
スルノ言其信實ノ確否果シテ如何

第十七

一 和戰之儀ヲ明断セシト欲セハ果決猛烈ノ之舉ニ
在リ若シ一歩モ寬仁ニ失スレハ忽姪息因循之惡弊ニ
陷リ政權於ニ奸民之手ニ落ルナリ故ニ一ツ西斷之
大決策ニシテ如何

右之各ホ之實ニ當今ノ御大事現今實地上ニ施
用スル大目的ヲ定メ時勢到當ノ御評議ヲ希
望仕候

四月

外國官

外國官問題 四條
第一條

王政維新ノ際舊幕ヨリ引續外國ノ通債大凡
 六百方弗^{一弗一銀}ノ高ニ及ブ故ニ今々急遽此債
 道果^{ノ債}如何^{ノ債}ノ内今内外費用影^{ノ債}之是ヲ償フ
 一 長州下關一條ニ付英佛 米蘭ニ償金三百方弗
 一 内城ノ高百五十方弗
 一 横濱ナリ上ニタルハナリ 英佛兩ヨリ借入高
 五十方弗
 一 英商ナルトヨリ貨幣高ニ借入高凡九百万方弗
 一 外國人ヨリ諸藩ノ引員高政府關係各凡
 二十三四方弗
 一 長崎引銀所引當ノ金高并横濱引銀所引當
 明臺造幣局鑄山石庫艦等外國人ニ割入ル
 諸拂高並通計シラ本文ノ金高ニ至ル也然在

大凡ノ數ニシテ詳細ニ記シ難シ

第一條
 前今世上一般ニ金銀流通ノ貿易ノ間此惡人金銀
 外國人ノ手ニ落テ其高凡正金三千万兩ニ及ブ
 今其者等ヨリ其公使ニ計出此惡金銀ヲ外國官ニ
 携來良金下引換ユルカハ其指毛ヲ償ワカトイ
 若シ其説ノ如クスレバ此金凡九百万兩而シテ
 辨スルノ道果如何
 新定ノ約書第一則ニシテ一分銀日方ニ文目三分ハ
 日本ノ銀貨ニテ其重サトロイ貫目百二十四グレイ
 ニ下ラズ其質純銀九分ニ下ラズ其文セモノ一分
 ヨリ多クカザルベシ
 右ノ通定約書ニ掲ケ有之此貨幣ハ日本ノ物ニシテ
 日本ノ物ニアラズ則内外ノ中洲ニアル高賣ノ銀貨
 ヨナスモノナリ故令ハ日本ナカラ外國人ノ小遣ト
 ナル間日本入ノ自儘ニテ難キト固辭也故ニ舊幕府
 ノ約ハ其約書ヲ守リ混和物ハ十分ノ一非

分ニ過キズト雖モ近來進々惡幣吹立且又大坂ニテ
新鑄ノ一分銀其質甚惡シリ且或方々モ同様
濫造ニ歸ス故ニ本支ノ如ク外國人ノ損毛ニ
及ビシナリ是ハ貨幣ノ有テハ貨幣ノ政府ニテ
何様ニ持出スル紙幣同様通用スルモノト昔
風ノ行なニテ思ヒ誤リテ發源之元ナリ

若シ各國ハ公使ヨリ古ノ惡金銀ハ政府ヨリ出セシハ向々
ナレトモ其内ニ他所ニテ偽造ノ物モアルヤト聞訊スル
其確答果シテ如何

是ハ政府及ヒ政府外ニテモ籍ニ濫造ノ二分金
鑄造セシ風潮アルハナリ本支外國人ノ本而己ニ千
万兩アリシトノ説ナリ見シハ新舊政府ニテ造リ
出セシ惡性ノ貨幣而己ナラズ他所ニテ籍ニ鑄造
分亦少ナリナズト推シ知ル

日本政府ニ於テ惡金銀ヲ製造シ定約ニ背キ内外人

民ヲ惑乱スル汗若ヲ萬國ニ得タリ此汗若ヲ一洗スル

道果シテ如何
右ノ條々ニ實以國家ノ大事一官一司ノ力終ク挽回スル
ニテラス宜シク速ニ御許議有之度候也

三月

外國官

右右意有之者ハ可成又差急キ申出候様有之度候事

議長

右兩條問題ノ儀ニ於四月十七日外國官判事山口松藏
同本并弘藏公議所へ出張アリテ其事情題未テ議員
一何ハ説話ニ及ビ同二十一日二十三日議員一同見書
議事書上ニテ讀下テニ及ベリ

議長ヨリ公議人達書

凡至急要件ノ問題コト有ル節議員一同定見ヲ認メ議事所
議上テ衆議ヲ盡シ同論毎ニ集メテ案ヲ作リ建自スル心
將非常ノ事ナレハ定則ノ可否ニ拘ラズ惟行政官ノ參考
備ルヲ要ス

但し詳論務メテ簡易ヲ要ス策問虚飾ノ文体ヲ用ヒザル
ヲ欲ス

四月

諸侯公議參聽願ノ向ハ前以其藩議員ヨリ申入毎會十
又送差支無之事

議長

寺中議員辦事

新津 濟
伊達 五郎
雨森 謙三郎
錦織 宗大
新宮 左大夫
中川 潜波

廿三日箱訃ヲ判定ス

公議所日誌第十

四月廿三日 例別當分副議長神田孝平議員百早八人諸侯
參聽入例席ハ出仕外國官問題ヲ詳論ス讀上テ午後第一
字副度寮撰修森全之丞
詔書ヲ持參例席ニテ之ヲ讀上ル一同拜伏敬聽ス

詔書之傳
詔朕親臨汝百官羣臣ト五事ヲ揭ケ天ノ神明ヲ質シ獨起テ
皇張ニ危兆ヲ綴安スルヲ誓フ然ルニ吾皇君存未ク其績ヲ
存サズ朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ下ハ以テ億兆ニ憂ヒ今ヤ乃チ
親臨汝百官羣臣ヲ朝會シ大ニ施設スルノ方ヲ諮詢ス其補則
安老ノ決今自ニ在リ誠ニ百シリ腹心ヲ披キ肺腑ヲ表シ可ク否ヲ
獻著スルベシ朕將ニ副精竭力大ニ經營始スル所アラントシ汝
百官羣臣ソシ易成

明治二年七月四日
輔相口達書兩寫
今度海國是ノ大基礎確立可被爲在御會議也

勅諭之通被仰出候間有是之新書取以來月四日迄可被
差出候尚遠之儀候條ヲ以
御下問被存候間此旨可被相心得候
但別殿存外有之面々參
朝可有言上事

有讀上ノテ第百六号外國商業規則ノ議事ヲ各議員ハ配分
第四字一曰退散也
四月二十二日
同日七日會議并例刑上院副議長松浦肥前守議長大原
少將副議長察模倫森金之丞等分副議長神田孝平伊勢
渡會前判事元因直天高議事二百五人參聽ノ諸度戸澤
中務大輔本分河内外保科輝正忠其外諸藩參聽人例第
出仕例刑上院副議長改正第百四号議事并第百五号漢土及第法
ノ可答ヲ決メテ後第百六号外國商業規則案許論ヲ讀上ノ果
今日配分ノ議事ヲ讀取リ二因退散也

改正第四號議案

副議長察模倫 森金之丞

第一 士分以上通稱ヲ廢ス實名ノ之可用事

第二 士分以下ハ今形ニテ差置キ追テ可議事

第三 官位ヲ以テ通稱ニ換ルルヲ廢止スル事

第四 在任官ノ者其官位ノ姓名ノ上ニ表之可用事
但私用此例ニ拘事

他人ニ稱呼スルニハ第四号例ニ拘何名ナリモ其便利ニ從テ
之ヲ別ル隨意スルハ可事

右議案可答決定ノ儀
可トスル者百六十三人
駿州 一橋 秋月 望里 柳本 大野 小幡

尾州 田安 鹿島 下妻 大田喜 園山新田
 肥後 前橋 林田 宇津 大田喜 山家 柏原
 肥前 越前 郡山 園部 今治 久居 吉井
 水戸 園部 福本 川越 小松 沼田 柳生
 津 久留米 岩村田 佐土原 高槻 藤野 三日月
 西條 飯肥 新谷 大洲 小田原 萩野 山崎
 土浦 佐野 伯太 園 勢州 飯野 廣島新田
 小濱 西端 高宮 八戸 藤原 大垣 大垣新田
 昌年學校 丹南 龜園 小宮川 大垣 大垣新田
 黒石 喜連川 浅尾 宇都宮 延岡 矢野 井上河内
 古河 喜原 小野 坐落 結江 有内 三根山
 松本 彦根 安志 坐落 豫州 吉田 三上 郡上 丸園
 丹州 大村 芝村 堀江 藤生 岩村 日出
 駿河 大村 芝村

高園 飯田 吉田 山上 苗木 高反 高島
 由雲 大田原 西大路 彦州 勝山 小倉新田
 豊園 鳥山 生實 袖戸 大少 梓葉 水口
 孝和 出石 紀州新宮 中津 下館 成羽
 足守 岩槻 小坂 多度津 三日月 津和野
 福知山 老龜 免戸 紀州田邊 唐津 佐倉君
 尼ヶ崎 森 上田 金澤 新庄 須坂
 不口 三ヶ者 十ヶ人 新谷田 濱田 壬生 中村
 宇和島 福山 三池 長尾 推谷
 入吉 笹山 可名相半 三ヶ者 九ヶ人 作別 勝山 三田 高鶴 蓮池
 柳河 勝新 村園
 三草 長勝
 無定 論 者 十ヶ人
 姫路 明石 水代 宇津 高遠 館山
 三春 大田 備中 鶴牧 伊勢 高遠 館山
 漢土 及 其 法 可 名 決 定 人 勝

可卜久者百四十六人

駿州	高松	肥後	肥前	水戸	津	厚朴宮	園山新田	中津	富山	佐土原	勝所	佐倉	西大路	喜連川
前橋	一橋	福山	高鍋	大垣	大聖寺	飲肥	西尾隱岐守	濱田	笠岡	丸園	丸園	佐野	丸龜	喜連川
西條	吾津	田安	土浦	津和野	生島	生島	高園	高園	小倉新田	飯野	飯野	小橋	小橋	小橋
持木	大洲	高家	吉田	肥前田邊	肥前田邊	大垣新田	大垣新田	高園	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎
宇土	延園	一宮	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野	藤野
水	三田	長尾	郡上	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草
岩槻	小野	長尾	郡上	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草	三草

井上河内守	昌年學校	浪尾	伯太	丹波	吉井	八戸	無定論	川越	高遠	足守
又吉	岸根田	生實	神戶	新田	林田	鹿野	鹿野	宮津	高遠	鹿野
古河	三根山	高嶋	三日月	大田原	大田原	大田原	大田原	三日月	三日月	三日月
金澤	酒坂	高原	高原	高原	高原	高原	高原	高原	高原	高原
守山	守山	守山	守山	守山	守山	守山	守山	守山	守山	守山
三春	三春	三春	三春	三春	三春	三春	三春	三春	三春	三春

第四部決議案

天裁候書付

第四号通称(廢)實名(可用)議再次會議衆論一定仕候才

即奉伺
天裁候若御則止之廢有之候節、勿論御採用、有無共御告示上
御施行有之度候也

四月

議長

猶以御告示、前議案二枚、内一枚、御採用、有無共御檢印、御封
私有之度候也

第五号決議奉伺

天裁候書付

第五号漢土及某法御採用、議御採用相成可然、上衆議一定仕候

天裁候若御則正ノ廢有之節、分論御採用、有無共御告示上
御施行有之度候也

四月

議長

猶以御告示、前議案二枚、内一枚、御採用、有無共御檢印、
御封私有之度候也

公議前月誌第十一

第六号外國商業規則案二條

外國人上高社ヲ結成候儀差許候事

第一

高社取結差許候共右商業本指共有之商政府ノ關係ハ

無之事

右ノ通御規則相立候テハ如何

外國交際課

右評論鈔出

依田者高川二郎

外國人上高社ヲ結成候ハ、五害アリ、然爲ニ我々會ニテ被救護シテ
我々爲ニ利ハ被歸ス、テ損ハ我ニ歸ス、一ナリ、期後、ナド過于多ク、
被我々人ヲ罵リ、打擲ス、ル、アリ、ト、則チ、其ノ事、アラ、ニ、ハ、争、論、ヲ、各
々、事、ト、シ、テ、二ナリ、高、價、ハ、理、義、ニ、暗、ク、若、ク、後、下、内、通、レ、社、ヲ、
結、成、ス、謀、テ、以、テ、我、社、外、ノ、高、人、ヲ、苦、シ、ム、ル、事、アリ、ベシ、ニ、ナリ

社入ル者モ逐電テ下ルアラバ被命ニシテ之ヲ求ム
ベシヨリ關係無キセシトシテ外國文際ノ道未ダ互カキ是
等ノ弊法ヲ多クカスルナリ

同論者
波多野源右衛門 北村經藏 小淵與右衛門 荒井致吾
大田省吾 戸田保 那須金吾 生田平格

過日議ルル處ノ用鎖和歌ノ條決定ヲ俟テ行ソモ遅カラス
大略同論者
加藤右川 磯部寛五郎 天吹卯三 松浦鶴治
兼谷貞藏 宇田富之助 望天兵亮 錦織常大夫
久松修理 野村倫右衛門 中里行藏 田邊 確
松崎左衛門 蜂屋新 近藤明造

先ツ商人ニシテ差評サレ試ミテ後諸侯大夫ニ及ズベシトモ
同論者
大畧同論者

附二理兵衛 仙石若菜衛 有馬政太郎
三田稱平

條約ヲ改定シテ後高社等ノ事ヲ議スベシ
大略同論者

佐原忠吉 新宮左大夫 年井東馬 小泉重兵衛
近藤百助 中川潜史 雨森謙三郎 坂田 芳

文際ノ規則ヲ互テ後是等ノ事ニ及ズベシ
大略同論者

杉森源兵衛 岩田瀨五郎 武田平之助 善野 司
三橋 肇

大基礎確立ノ上御差評シ可然候
大畧同論者

富松何右衛門 望月太兵衛 兒玉外記 園田勘右衛門
青木定入 岩本龍台 岩本傳藏 釜淵英之進
白石左衛門 佐藤 栄 大久保金吾 堀江寛右衛門

國體基礎多テ後議スベシ但シ國內ヲ域リ商社ヲ試シ可也

根本未ダ擧ラザル者アリ商社等ノ末事ニ及テ可ラズ

商社ノ事甚不可ナリ且高業ニ付政府關係無シト雖モ我

國入彼方為メニ私等ヲ得ハ傍觀スルノ理アラハヤ

高社ノ事可ナリ然レモ嚴ニ規則ヲ立茲ニ計ヲ勵メ者ハ免度

處置ニ可及音兼テ達シ置ベシ且損失ニ付政府關係無ク

ト申譯ニ難相成テ存候間前以良策ヲ建置ス

損失有テ政府關係無ク之ヲ定メハ交易ノ權下ニ移リ我ノ

金銀等悉ク彼ノ有トナラシ

損失有テ政府關係ナシト云ハ外國人恐クハ社ヲ結ベテ

欲セザル故ニ損失等アラハ政府ニテ彼ノ全權後入ト談判ヲ

遊グベシ且我國人ハ交易ニ馴レザル故商社ノ條為テ激密スル

然レモ社ヲ結ブハ下民ノ申合セ故右ノ如クセズトモ議事通リニテ

可ナラシトナラハ異論ナシ

赤見為在門

小柴 類

糟屋權兵衛

下津權九

坂口音之度

我ノ

中野重明

恐クハ社ヲ結ベテ

全權後入ト談判ヲ

遊グベシ且我國人ハ

然レモ社ヲ結ブハ下民

可ナラシトナラハ異論

損失有テ政府關係無ク

欲セザル故ニ損失等

遊グベシ且我國人ハ

然レモ社ヲ結ブハ下民

可ナラシトナラハ異論

損失有テ政府關係無ク

欲セザル故ニ損失等

遊グベシ且我國人ハ

増田鉦太郎

大田原高

小原五郎

松下加右衛門

加集寛介

國情一定文際ノ道

屏ルヲ待テ行クベシ

之元六政府關係ノ制度無ル可ラズ

福井大助

異論ナド雖モ我ニ益ナリ由事ヲ生ズルニ至テハ國辱ヲ釀ス是
非ナク政府ヲ關係スニ故ニ我ニ不益ナラザル法ヲ定ムルノ上
用ヒテ可ナリ

麻尾達左衛門

大畧同論

多花彌左衛門

今數年延引ツ方可然且商社ノ議ニ付自然外國人大損失等
申スルニ至レハ余儀ナク政府ヲ關係スルニ故ニ社ヲ結バザル
方可然候

鶴屋房春

同論

小林儀左衛門

此法ニ西洋ニ行クベクニテ我商民ニ行ク可ラズ

生田小膳

我國ノ商民不信ノ弊ヲナシ彼ノ損失ヲ累ル時ハ政府ノ關係ヲ

免レザルベシ外國交際ノ要ハ信義ヲ確立スルニ在リ是等ノ
小節同ニ在ラズ

滝澤省吾

我商人出金ノ期限等ヲ定ムルハ外國人必ハ償ヲ政府ニ
請フニ至ラズ豈關係無トシヤ然レハ國體充實別國ノ權我ニ
備ルハ此法モ可ナリ

福口十郎

内外多事ノ折衝商場ヲ以テ要トス商社ノ儀御許答
無之方可然候

川西六三

我國ノ商人彼國人ニ不信アルハ必ク彼ヨリ我ニ迫リ政府ニテ
關係スルニ至ルベシ故ニ國內商賈ヲシテ社ヲ結ビ實地ニ試ミテ
後外國人ト社ヲ結グノ官許アルベシ

園田保

外國渡來ノ品一切官ヨリ買上テ然後高買ミ各々入札ニテ
落スベシ且可技技巧ノ品ヲ載シ來ルヲ禁ミ若シ私賣買
スレハ教科ニ處スベシ我國産ノ額ニ應ジ且市中ノ額ヲ確定

セシテ要ス多ク國產ヲ渡スルハ日用ノ物價翔貴スルベシ

同論ノ者

高橋和久留 早川典一

成田作右衛門

此法可ナリ唯高社全權ノ者公法ニ本キ法律ヲ嚴ニスル高社
ニテ租年ノ物産等ヲ引當テミテ金ヲ集ル等ノ法ハ官許非
シハ行レ難シ故ニ官ニテモ夫レニ應ル程ノ引當ナケルハ之ヲ許サズ
若故有テ分數スルハ前ハ政府ニテ是ヲ償フ高社ヲ通法ナリ
是等ハ政府ニ關係セザルハカラズ

岡本直記

同論

村田忠三

我國ノ商人ハ利ニ趨リ候故彼ニ押レ合意外ノ好ヲ生ゼモ
測リ難シ此度嚴令ヲ示スベシ且高社ノ事ハ長外國掛リ
管轄可然候

同論ノ者
富永至馬 秋元慶三

塚本九郎

異論ナシ以前長崎港ノ如ク取締被為ス候上ニテ許スニ
長崎第七市

輕部鶴彌

大略同論

我國商人渡海ノ上魯地經見ノ後ヲ期ス

有竹衛門

國內飛脚等々初シ其他同産ト唱フル者林各會社ニ結ビ候儀
官ヨリ御世話アリテ後外國人ト社ヲ結ビ

杉浦 誠

將執事等當ナリ猶遺漏ヲ補フ左ノ如

商人共船艦買入 且久國港々ハ高店取具キ移在等願
上ハ差許候事 且高業ニ付テハ損失ハ政府ニテ聞ラスト雖
其理非由直テ裁スルハ為メ又國同様各港ハ其筋ノ後人共
置キ百事為取候事

岡田雄次郎

此件御差許相成リカテ台セテ高法ヲナサシメ六得八利ニ

亦多クモテ之商權專ラ外國又ノ手立カラン

早ク諸侯以下四民僧侶ニテモ約ヲ定メテ一様義許トスル

員ヲ極メ東京大阪ノ兩府ニ於テ大高社ヲ至テ進メ小高

社ヲ結グル時ニ至リ其小高社外國人ノ入社ヲ許スベシ

大高社ノ先ツ邦人而シテ結ビ最初ハ官ニシテ監督ス別ニ

判官事以下ノ諸員御撰用アリテ損得ハ官ニ關係セサル

等ノ規則ヲ定ムベシ

會社ヲ結候趣意規則等書取テ以テ雙方ヨリ政府ノ爲

無ク高業上ノ損失ハ政府ニ關係無ルベシ

御差許ニ可然但シ政府損失ニ關係ナキハ勿論ナク是後我ノ

私曲ニヨリ損失セルハ因ヨリ保護セラルベキ儀ト奉存候

文際ノ道算キ得ハ許スベシ但シ政府損失ニ關係ナキハ至當

ナレバ大損失ニテ其身ノ進退ニモ係リ候節ハ彼ヨリ政府ニ親ニ

至ラシ故ニ先ツ規則御一定後我商人ハ篇下御許上許ベシ

方今種々ノ事ニ始テ彼ノ汚辱ヲ受ルノ際應社ヲ許シ

大損失アリテ之ヲ償フノ道ナリシハ其損失宜ク唯商人ノ心ニ

止ランヤ

志賀律三郎

我ヨリ彼地ニ社ヲ高社ヲ結ビ

皇國ノ一被弊ヲ補クノ謀ヲ興スベシ社中若シ争論ヲ起シ

和親ヲ破ラバ果シテ許クモノ費多ク生ゼシ商業ノ損失ハ政府

皇國ノ一被弊ナレバ商人ノ損失ハ歸テ

皇國ノ一被弊ナレバ商人ノ損失ハ歸テ

二條共信義ヲ以テセザレハ

朝廷ノ徳ヲ醸スベシ何トナレバ商業ノ權

朝廷ノ徳ヲ醸スベシ何トナレバ商業ノ權

其時ヲ得ザルニ似タリ

櫻之丞大次馬

九鬼東馬

田東

永野

志賀

和親

皇國

朝廷

其時

此等御許ニ相成レバ萬商私曲ヲナシ遂ニ福ヲ醸スニ至ラシ

西海各國唯利ヲ是計ル旨ク嚴ニ規則ヲ立テボイカ但シ和親ノ意ヲ結バズシテ叶ハザルナラバ格別然ラザレハ今暫ク其意

國人外ト高社ヲ多ク懇懇ニ結ビ取引勝劣ヲ定メテ諸君ノ負數モ累大ニ至リ行商其機ニ乘ジテ詐詭ノ術ヲ施サシ高社ノ義假令御國益相成候トモ決テ許スヘカラス

彼國へ領事官欽差ノ官自ヲ遣サレ我人ノ民海外諸產物ノ多寡亦佳悪及ビ賞金ノ貴賤ヲ諸知ルル上テラズハ我高社損毛勝リ

白皇國ノ財力ニモ響クベシ

高社ヲ結テ許スヨリハ文明國ノ如ク政府ニテ商業ノ憲律ヲ立物價ノ權下ニ有ラザラズルヲ緊要トス

高社ノ權政府ニ在テ下民ニ及ボサズ

皇國ノ權ヲ讓スル弊ナケレハ可ナラシ然レモ物ニ先後アリ是等ハ先スル所ニ非ズ第ニ條々至當ノ儀ト奉存候

貿易ノ法ヲ違ハハ有無相通ニ國家ヲ利スル權常ニ官ニ握ルベシ一日モ吾等天高實ニ假ルルハラス況ヤ今日多事ノ秋ニ於テコヤ

異論ナシ然レバ何國商人奸智ヲ逞スル者アリ故ニ高社ヲ結ブニハ信ヲ失ハザルヤリ致サレ時ハ

白皇國ノ由トナリ高社ヲ益ナキ儀ヲ示テ説諭スベシ

我國內ノ人ノ民ニテ高社ヲ結ビ彼ヲ利スル權ヲ有ラズ大ニ可ナリ

彼商人ト社ヲ結ブハ宜キアリ

萬國普遍ノ貨幣出立スル迄引クベシ爾今彼我ノ国力

西村松藏

佐々木鏡右衛門

中澤其作

坪和歸藏

京僧彦助

日置熊次郎

權常ニ官ニ握ルベシ

成富新兵衛

不當故結局彼三制セラレテ衰弱ノ一端トナレベシ

黒石 彦

政府商業損失ニ関係セザルハ至當ナリ但し
御國體立テ後タリトモ國內ノ法令ヲ下シ又西洋各國モ定約也
サレ難逃関係ノ患ヲ生スルコトアラシ

藤部誠一郎

既ニ御規則相立候交易商社ノ法ナレバ差許テ可ナリ西洋各國
商社ノ體裁ナレバ時ニ臨テ不可ナリ第ニ條政府損失關係セ
サレ至當也

千野良之輔

回論

森安七右衛門

約束一タビ違ハシ國內煩擾ヲ生セン政府ノ關係セザルヲ
得ズ文際ノ大本立テ後子其可ヲ見テ是ヲ許スベシ

鈴木權作

確キル規則相立ザルトキハ弊害ヲ招ク其爲トナランモ
計リカクシ商社ハ見合セ可然

園本治兵衛

我國海外各港ト相通シ利權彼ニ歸シ遂ニ爭端ヲ
開カシ

津川天柄

商社ノ儀不可然後來政府ノ關係ハ人患ヲ生セシ

第一號 上裁

第一号自諸侯乃至上士本末覆置法則案決議ノ通
可然但列藩其圖籍奉納ノ儀付尚追テ而御沙汰之節可有之
其ハ追テ右法則ノ儀御沙汰ニ難被為及旨被

第二號 上裁

第二号御用金ヲ廢シ國債法可相用ノ建議可然候
得共當時會計ノ基本取調中付追テ而御沙汰
可有之上旨被

第三號 上裁

第三号里數改定ノ儀建議ノ通可然但此儀ハ尚
御出候事

細詳取調可申出上旨民部官に被仰付候付此段可相達旨被仰出候事
四月
行政官

正誤
第八上七葉同中澤見作許論醫學科中本道學下
記七この本草學ノ語リナリ

公議所日誌第十二

御國體之儀付問題四條

別表察撰修

森 金と在

第一

方今我國體封建郡縣相半スル者ニ似タリ如此ニシテ將來ノ國是果シテ如何

第二

若シ之ヲ改メニ歸セシムル其副封建ニ歸スベキカ將郡縣ニ歸スベキカ其理各得夫果シテ如何

第三

若シ郡テ之ヲ封建ニセバ之ヲ如何措置シテ人情時勢ニ適當スベキヤ

第四

若シ郡テ之ヲ郡縣ニセバ之ヲ如何措置シテ人情時勢ニ適當スベキヤ
右問題ニ付五月四日衆議員及復詳論ノ上連名ニテ下文ノ議案ヲ差出セリ

御國制改正ノ議

第一

皇國一圓私有ノ地ヲ公收シ政令ニ出ルヲ要ス

第二

大國ハ一府ヲ設ケ小國ハ近傍ノ國府ニテ管轄スベシ每府知府事一人ヲ置ベキ事

第三

大凡十方石ノ土地毎ニ一縣ヲ設ケ知縣事一人ヲ置キ其國府ニ屬スベキ事

第四

親王ヲ皇族トシ公卿諸侯ヲ貴族トシ羣下ニ居住セシムル事但シ高石以上ノ藩臣モ貴族ト稱スベキ事

第五

大夫以下諸藩士迄ヲ上士下士ニ等ニ定ムベキ事

第六

府縣ノ知事ハ當分ヲ限リ舊藩主ヲ執政參政中ヲ任ゼシムベキ事

第七

府縣判事ハ銓選ニテ任ゼシムベキ事

第八

親王以下臣士夫私畜スルヲ禁ジ従僕其分ニ應ジ入貞ヲ定メ附屬スルベキ事

第九

是迄士列ニアリト雖凡士ノ任ニ堪ハル者ハ其分ニ應ジ產業ノ手當ヲ賜リ農工商ニ歸スルヲ許シベキ事

第十

至上尙威資測定ノ事

第十一

皇族ノ俸祿ハ平均ニ定ムベキ事

第十二

貴族上士下士ノ俸祿ハ各五等ツニ定ムベキ事

第十三

皇族以下ノ俸祿總テ廩米ヲ以テ下ニ賜候事

第十四

職俸ハ別ニ金ヲ以テ定ムベキ事

第十五

寺社地ノ廢シ金米ヲ以テ相當ニ下ニ賜俸事

第十六

西京ノ衛兵府縣ノ常備兵ハ上士下士ヲ以テ之ニ充テシム事

第十七

要港ハ海軍局一ヶ所ヲ設クベキ事

第十八

人才ヲ選シ海陸軍將ニ任スベキ事

第十九

府縣毎ニ文武學校ヲ設クベキ事

第二十

府縣毎ニ衆議院ヲ設クベキ事

但右院中ニ於テ廣ク銓選法ヲ設クベキ事

第二十一

毎年諸道ハ巡察使ヲ差遣スベキ事

右同議ノ者

加州 紀州 蕪洲 姫路 吾回松 前橋 大垣

郡山 大聖寺 舟山 園山新田 膳所 唐津

廣島新田 大溝 高取 下籠 園部 榎谷 柳生

高富 園部 高取 下籠 園部 榎谷 柳生

西大路 一宮 大垣新田 松園 犬山 三上

郡上 勢州龜山 昌平學校 舉母 播州 赤穂

下妻 結城 山上 鹿島 三上

一 大藩 府中 小藩 縣ト改ムル事

一 藩主 即チ知事ニ任ズル事

一 藩臣 朝臣トシ別事以下ノ諸官ニ任スル事

一 但シ知事ノ私用ニモ假借シテ任ズル事

一 舊領地ハ後未ク儘之ヲ預ケ知事初ニ廢ノ給俸及ヒ

一 兵賦諸費ニ供スル事

一 右ノ知事ハ大故ナラシムバ世襲ノ事

一 中下大夫上士ノ采邑ハ之ヲ廢棄スルニ換ヘ東西ノ京ニ

存存セシムル事

一社寺領其地土地人民ヲ有スルモノ皆廢棄ニ換ヘキ事

右因該ノ者

駿州 飛前 雲州 彦根 明石 高田 福山
 佐倉 渡 苗木 足守 鳥山 笠原 小豆川
 小倉新田 大洲 女重 箕山 糸島川 田代川
 大野 芝村 成羽 伯太 田原 黒川 延岡
 上田 安中 高遠 籍江 林田 長南 豊岡
 因山新田 津和野 西端 庭瀬 新見 小田原
 飯野 彦別將少 齋瀬 鳥羽 新見 小田原
 萩野 山 彦別將少 高尾 丸龜 新宮 宇和島
 水口 天馬 新谷 佐野 福江 安志 湯原
 孫州士田 丹波龜山 佐野 福江 安志 湯原

方今我國體所親郡縣ノ始キ者相參ト雖モ大抵其創封
 封建ノ意今一旦強ク之ヲ改メ一ニ歸セシムルモ只人情瘠
 騷ノ難クノ一ニナラズ廉耻ノ美俗ヲ毀リ躰道ノ惡弊ヲ生
 國服ヲシラ衰弱ヤルニ至ラシ入指時勢ニ適セズバ

國服ヲシラ衰弱ヤルニ至ラシ入指時勢ニ適セズバ

聖上 詔勅ノ旨ニ應ラシカ
朝廷ニ於テ大權ヲ移シ刑政必一ニ出スルハ
旧貫ニ仍ルト雖モ亦大害アルナリ今試ニ施行ノ策ヲ陳ス

大小諸藩連ニ爾書ヲ賜ルハキ事
但ニ漸ク以テ土地ノ有餘不足ヲ檢之若實適セズムルナ

一 刑度ハ一ニ
朝廷ニ體認シ一途ニ歸スルキ事
但ニ歳久ニ一歳ノ賞典刑政ヲ書シ

一 刑裁ヲ併ク心キ事
朝廷ニ會同ハ土地ノ遠近ニ一刑度ヲ立行被時ヲ躰シムガハ

一 刑會同ハ土地ノ遠近ニ一刑度ヲ立行被時ヲ躰シムガハ
但ニ國役軍及軍資入金在時決シテ急慢ノ可ラキ事

一 刑會同ハ土地ノ遠近ニ一刑度ヲ立行被時ヲ躰シムガハ
但ニ國役軍及軍資入金在時決シテ急慢ノ可ラキ事

一 又各藩其總界ヲ正シ相侵ヲナリ禮讓ヲ以テ相親スヘキ事
一 公卿微士ノ類ハ其内侯トナシ土地ヲ與ヘズ歲俸賜ルヘキ事
但シ從前ノ領地ハ括置事

一 臨時ニ巡査使ヲ遣シ政刑ノ整正ヲ檢査スヘキ事
一 存藩縣民土地ノ星數免有ハ漸チ以テ合一セシムヘキ事

一 東西兩京ヲ四圍ニ畿内ノ制ヲ建ル事

一 西京ハ五畿東京ハ關八列リ定メ畿内ニ在ル諸侯ハ所在ノ
最布ルル官領ニ移封シ費用ニ充テ官領ヨリ給シ年
賦ニテ之ヲ土納セシム而文武ノ士ヲ諸藩ヨリ高ニ應シテ
百ニ出セシメ朝臣トナシ畿内ニ任セシメ親衛兵トナス律下大
夫上士モ同ク畿内ニ任セシムベシ

一 諸侯ノ封土ハ二十方石ニ限リ其餘地ハ子弟ニ分封スヘキ事
但シ子弟ナキ者ハ其地ヲ官ニ預リ子弟アルヲ符テ之ヲ
封スルヲ許ス衣官ニ預リ中ハ其租稅ハ官ニ納メ
其政入金ハ藩ニ委メ新田込高等ノ規則モ同斷
一 子弟分封ハ十方石ニ限ル事

右二條ノ如クシテ國家ノ天賦勞タル者ハ封シ二十方石ニ充ル者
凡百餘緡金銀並テ守ニテ賞スルニ二十方石ニ充メガル者ハ二十
方石ニ充ル迄ハ土地ヲ與ルモ妨ナシ

一 自利ノ土地ヲ以テ有功ノ臣ヲ封スル事
一 諸藩ヲ合シテ軍艦ヲ備ヘシムル事

一 諸侯ノ封土ヲ檢シ名實相違セガル者ヲ減シ其削地欠
クテ四方ニ前度府ヲ設ケテ各島ヲ具ヘ藩縣ヲ率制シ
公卿ヲ以テ之ニ任スル事

一 畿内ヨリテ王宮ノ諸用ニ充テカレバ故ニ諸藩ノ高ニ應
土地ヲ獻セシメ海陸軍等ノ備ヲ設ケ事
一 陸軍各藩萬石ニ半入ノ定額ヲ立テ官兵トシテ各藩ニ
附屬シ號令紀律一ニ

一 陸軍各藩萬石ニ半入ノ定額ヲ立テ官兵トシテ各藩ニ
附屬シ號令紀律一ニ
朝廷ノ副度ヲ受ケテ軍資各藩ヨリ官へ貢出シ官ヨリ之ヲ給

餘肥

富山

龍野

館山

兩京及七諸要地ノ兵等ニ備ル事

一藩主二十石ノ石高ニ應シ兵百ノ率ヒテ年々兩京へ
更ニ番スル事

橋本

一石以上ノ藩主ヲ藩屏ニ存スル事
但し是迄藩主ノ所ノ主地ヲ以テ朝臣ノ事向テ藏米
ノ者ハ土地ニ換ヘ藩兵九百石以下タルハ向取定テ
悉ク土有タルハ事

岸和田

右同様ノ者
官津 鶴救 三河吉田 大田原 杉山
飯肥 厚野 尾身 岸和田 柳原
七市 八戸 二河山 田安 作手 肥後
鐘山 小野 岩村 堀江 光園 三春 多古

柳本 藤生 高槻 伊勢野 久留里 喜連川
小諸 山崎 櫻井 高寄 村園 橋本 西條
御國體封拜議 三章 足利 小園 籠野

一我 神別ハ右義ヲ以テ立タル國ナレハ
皇統ニ連綿傳令舜禹ノ如キ聖人出ルモ禪讓ノ事ツルヲ
得ル此若義ヲ以テ作タル時ハ諸藩ノ國下雖モ其理ハ一ニテラ
累世君臣ノ義儼ニ廢ス可ラズ是今日ノ勢風主人情相通
變ス可ラザル事

第二

一方今封拜郡縣相半スルニ似タリト雖モ只今ノ天下ハ純乎
シル封拜ナリ其郡縣ニ似タル者ハ即チ
天子ノ公邑古所謂王畿ノ子里ノ地四方ニ在ルナリ今日
ノ勢其地四方ニ在ルル所ナリ雖モ太平無事ノ日ヲ待テ
之ヲ古制ニ復シ義及ビハ封拜ノ地ノ高ノ量ノ
王畿ト定メ其地ニ所在ノ諸藩ヲ旧封ニ應シテ解遠ノ

公邑之各手賜うべし或は其ノ二伊賀近江丹波若狭加八九畿下
ナラモ可ナラシカ

第三

一封建ハ君臣世契上下相親ノ事アリハ死カキ盡メ其社稷
ヲ守リ以テ 皇室ノ藩屏トナル郡縣ノ長ノ其令吏ヲ親シ
逆旅主人ノ智者ト不同事

第四

一我國四周大海外域ノ事ハ方所ナシ宜ク列侯ヲメ其藩屏
ヲ嚴ニシ其後入ニ防ガシムベシ今其藩屏ハ撤ニ郡縣トシカバ
其ノ上ニ常者ナリ其氏常主ナリ此兵成卒アリト雖モ禦侮
ノ任ニ堪ガル事

第五

一今今諸侯封土奉還ノ願アリト雖モ提封旧ノ如ク更ニ
御別物ヲ賜リ之レ始テ正フニ旧章ヲ廢テ新
詔旨ヲ體認
皇室ヲ翼戴セシメ毎年巡幸侍ヲ遣ハシ藩屏ノ得久ヲ
察スニ度讓ノ終ヲ行フベキ事

第六

一頻年兵禍連結シテ天下疲弊外事凱觀人心洶々此時
當テ國體ヲ護草スル決シテ宜シカラザル事

第七

一多卿ハ位有テ土地入民無ニ故ニ入相出料ノ權輕シ天料僻
遠ニ敷吏人ノ以テ有テ此ノ卿ノ第土ニ充テバ諸侯ノ益
將シテ親疎間錯スルノ理ニ相適ノ可キ事

第八

一東京ニ鎮將府ヲ置以テ東北諸藩ヲ撫御シ給フベキ事

第九

一自前年西列ニ鎮臺ヲ置テ官及ヒ公卿ニ其職ニ任シ
皇化ヲ布キ鎮撫シ給フ可キ事

第十

但ニ府ノ兵衛ハ天下喪祿ノ士ヲ募リ府下近傍ニ於テ
練ニ代ユルノ田ヲ給シ耕稼ニテ其力ニ食メシメバ兵ヲ
農ニ寓スルノ事ニテ入ニ其ノ上ニ親シ其定ムル念ヒ
驅ラ死地ニ之カシムト雖モ敢カサレハシ

一隣境諸藩より一人のヲ精擗して鎮守二首屯之六以入其國
情ヲ達之且府政ニ與リテハ大海内一致ノ御政體相
可申可度

右同議ノ者

中村 水戸 紀伊田邊 海田 主生 二日市
大田備中守 西尾隆政守 筑後 須坂 折原
蓮池 生實 小坂 完平 沼田 池上 國崎
多摩津 目少 黒石

國體論節

天下ノ大勢ヲ論ズレバ天下ヲ分ニシテ封建其二分ニ居リ
天子畿内方千里ノ譯ナレバ國
ノ制ナレバ此レハ常ニ十倍ナルノミナラズ又要地ニ要地ニ大兵屯
諸藩置カザルニ則チ右ノ失澤ハ不以封ノ理ニシテ封ニ上ニ於テ
是モ置算アルコトナシ天下ノ治不治政事ノ與否ハ其人存存ト
ナレバ今ノ如クナレバ天下ノ治不治政事ノ與否ハ其人存存ト
將用禍變入心海々臨深履薄ノ思ヲナレバ此儘ニシテ

安集撫綏を二高志クハ動亂駭擾セテ予況中大創度予ハ緩草ニ以テ
之ヲ攪キミルニ於テ此レ微皇等自費ニ仍ルニ以テ下ニ於テ其
幕流弊下諸侯朝貢之留ノ利受テ大慶幸セザルニ得テ其規則ノ
弊ハ不替於此矣

方今 朝廷多事 徵臣等銘之上リ 管窺ニ元長ニシテ 恐ラハ披覽ニ
進ヤカラシム 故天意ヲ前思ニテ 以テ皇天伏仰裁正

右同議ノ者
今治 宇都宮 小南 津澤 浦 久居 津 鴨方 福知山
大田 久留里 新島 平下 西尾 池田新田 尾川
川越 大田喜 將木 大村 長島 長尾 園田 柳良 新島
志 高瀬 高島 長瀬 本多 宗王 三月 森 飯田 阿久
方今 國體旧チ東ニ封建郡縣相半ス又於テ年諸藩又其其版籍
ナレバ上下元ニ至ニ之ヲ封建者ニテ郡縣ナレバ勢ニ凡ニ似たり然リト雖
其實則郡縣ノ行ハ難カラズ凡ソ封建ノ諸侯ニ百七十餘家皆其地人
ノ恩義因結ニテ類人人心沸騰ノ患アリ故ニ其版籍ヲ改メテ

新多之ヲ本土ニ封ス之公卿ニ百幸ニ命ニ下ス之徒ラ之位階ノ
貴キノミニ食邑ノ制モ未嘗テ定テス自然公武ノ別アリテ人
心モ一和ス故ニ親王公卿ニ亦封土ヲ賜リ諸侯ト班セシメテ家備
修メ王事ヲ敷メ之ルニ如カク隨テ從前ノ弊ヲ等々凡百ノ制度
典刑軍國ノ政ヨリ雲械ノ制長ニ至ルニ遠邇同轍海内一家ノ
如リスベシ然レテ大小侯伯藩屏ノ任ニ於テモ一身之盛衰凡百ノ
嚴謹ニ魂ニテ可ナリ之封建ニ郡縣ノ意ヲ寓シテ内外彌堅固ニ
孰前 相原 三池 小幡 弘前 美濃
奉對御國體問題四條

夫國體ハ萬世ヲ且テ動スバカラザル者ナリ
天祖肇年ヲ鴻基ヲ多クテ玉ヒシヨリ四海一統
百王流無窮其間礼臣大權ヲ攘テ有テ雖一昔ラ一人ノ
天子ヲ設銀ル者ナリ若クハ義隆立ニテ自ニ至シテ夫
若臣ノ我ハ天地ノ人入然レテ倫ノ大本ニシテ古モ義隆ノ在ル所
死生ヲ不顧臣子ノ命ヲ盡シテ是所謂和魂ト稱ス者ナリ

高國ニ封ス之公卿ニ百幸ニ命ニ下ス之徒ラ之位階ノ
貴キノミニ食邑ノ制モ未嘗テ定テス自然公武ノ別アリテ人
心モ一和ス故ニ親王公卿ニ亦封土ヲ賜リ諸侯ト班セシメテ家備
修メ王事ヲ敷メ之ルニ如カク隨テ從前ノ弊ヲ等々凡百ノ制度
典刑軍國ノ政ヨリ雲械ノ制長ニ至ルニ遠邇同轍海内一家ノ
如リスベシ然レテ大小侯伯藩屏ノ任ニ於テモ一身之盛衰凡百ノ
嚴謹ニ魂ニテ可ナリ之封建ニ郡縣ノ意ヲ寓シテ内外彌堅固ニ
孰前 相原 三池 小幡 弘前 美濃
奉對御國體問題四條

天下ノ國ニ是ト云ル者之國是ト云フ而シテ其同也日本古クハ新者何
國體ヲ重シ大義ヲ明カニ禮制ヲ嚴シ政教ヲ布キ弟欲ニ心解スル
ノ意ヲ務メテ所謂國是ニシテ人心ヲ一スル所也夫國是確定人心
一和スルハ聖域ノ功ナリ也夫國體ノ便ヲ用テモ尚之レ可ナリ昔モ國是
定メテ人心一ナラザレバ講和モ全ク得ズ況ヤ戰ヲヤ苗ニ人心和
テ封建モ治ム可ラス況ヤ郡縣ヲ改メ制スルヤ也今若クニ要路
入レシガ好ム所ヲ以テ之ヲ名ツケテ國是トシテ重寶ヲ懸ク嚴刑ヲ行ヒ
僑兆齊心カラザルノ口ヲ教訓セバ果シテ天下真ノ國是ト謂

心カ如何

有人云云大事者以正人心為本。然則上之人者人心之正否凡以正之。道
余亦云云下之人者正心上。重事以生年。素心以事。心正則事同。
心不正則事異。忠之為難。誠之為難。生之為難。果之為難。然則天下事何者。意之
成否之況也。創度之。後章之。前謂政事。大基礎。百世之國是。凡有卡
一致正心以テ。皇基ヲ護ルニアラズヤ否。

第四

夫死者治外夷類。則親之。內國未。密靜。天下久。民生之。聊
也。封。建。之。制。度。之。後。章。之。前。謂。政。事。大。基。礎。百。世。之。國。是。凡。有。卡
一。致。正。心。以。テ。皇。基。ヲ。護。ル。ニ。アラ。ズ。ヤ。否。

右同議
人吉 榊原 一橋 秋田 敦賀 黒羽 松代
此其大畧ナリ其似ノ者ヲ載録セズ



